第12号
December 2014

いわて高等教育コンソーシアム
The Iwate Higher Education Consortium

NEWS LETTER

～岩手の復興を人材育成から、今こそ連携の力で！～

Index

■ 巻頭挨拶 1

■トピックス 2～7

□第11回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム「大学間連携と地域活性化への取り組み」

□第４分科会「復興と連携」を主催

□シンポジウム「震災の記録と記憶をどうとどめるのか －震災資料の収集保存と活用－」

□前期集中講義 ボランティアとリーダーシップ

□前期 いわて学

□いわての大学に行こう！ ― いわて５大学、駅前講義 ―

□被災地学校支援プロジェクト

■ 特別寄稿 8

□「復興へのメッセージ」

■ 行事予定 8

いわて高等教育コンソーシアム詳細
http://www.ihatov-u.jp/

ご挨拶

いわて高等教育コンソーシアム
運営委員会委員長
岩手大学理事･副学長
丸山　仁

東日本大震災から４年が経過しようとしています。いわて高等教育コンソーシアムは、平成23年６月15日に、学長宣言『岩手の復興を人材育成から、今こそ連携の力で！』を社会に発信し、参加校の連携の力で、地域の復興を担う有為な人材の育成に取り組んできました。学長宣言の連携校は５大学（岩手大学、岩手県立大学、岩手医科大学、富士大学、盛岡大学）でしたが、その後平成24年４月に放送大学岩手学習センターと一関工業高等専門学校、さらに平成26年４月には、岩手県立大学盛岡短期大学部、同宮古短期大学部、盛岡大学短期大学部が新たにメンバーに加わり、10校での連携が可能になりました。

岩手大学では、「『岩手の復興と再生に』オール岩大パワーを」をスローガンとして、教職員・学生が一丸となって地域の復興に取り組んできました。しかし一大学でなしうることには限りがあります。コンソーシアムに集う10校が、それぞれの強みと特色を活かして相互に補完し合うことができれば、それだけ岩手の復興と再生を強力に後押しすることができるでしょう。

現在コンソーシアムの地域人材育成推進委員会では、「地域リーダー育成プログラム」の実施に向けた準備が進んでいます。これまで復興人材の育成に向けて実施してきた「いわて学」「ボランティアとリーダーシップ」「危機管理と復興」「地場産業・企業論（企業研究）」「ヤングリーダーズ国際研修」をコア科目として設定し、さらに地域課題解決プロジェクト等の実践的な活動を組み合わせることで、連携校の学生を、広い視野とコーディネート力を備えた地域の中核的な人材として育て上げようという構想です。コンソーシアムが持てる知の力を地域に還元し、同時に地域の教育力をコンソーシアムに還元してもらう。岩手の高等教育機関と地域社会が手を携えて、岩手の未来を支える人材を育てていくことが期待されています。

平成23年度から取り組んできました文部科学省の補助事業「地域を担う中核的人材育成事業」は、平成27年度末で終了します。補助期間の終了を迎えるにあたり、これまで行ってきた取り組みの成果を総括し、28年度以降の事業展開に向けて課題と展望を整理する必要があるでしょう。「市町村が消滅する可能性」に耳目が集まる今、地域社会が衰退する中で、地域の高等教育機関のみが繁栄することは不可能です。高等教育機関は地域社会の活性化、にぎわいの創出にどこまで貢献できるのか。その知恵と覚悟が試されています。補助期間の終了は、コンソーシアムの活動にとって大きな制約となることが予想されます。しかし見方を変えれば、その連携の実績と真価が改めて問われているのではないでしょうか。

東北初開催 第11回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム（岩手開催）「大学間連携と地域活性化への取り組み」

平成26年9月13日～14日にかけて第11回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム（主催：全国大学コンソーシアム協議会、共催：いわて高等教育コンソーシアム）が盛岡市で開催されました。東北では初めての開催となります。

今年度は「大学間連携と地域活性化への取り組み」をメインテーマに、一大学では解決が困難な複雑化・巨大化した地域的な課題≒グローバルな問題に対し、大学間のみならず諸機関が連携することで生まれる知恵と相乗効果について、先進的な取り組み事例をもとに学ぶ機会として開催されたものです。

シンポジウムでは、初めに愛媛大学の松本長彦理事・副学長から「愛媛大学における大学間連携の取組」と題して教職員の能力開発や学生のリーダーシップ育成に関する取り組みが報告され、次に山形大学の小田隆治副学部長から「東日本広域大学間連携組織“つばさ”プロジェクトの地域連携事業」と題してFDネットワーク“つばさ”の実績を基盤とした教育の質保証・向上システムの確立に関する取り組みが報告されました。続いて、神戸学院大学の岡田豊基学長から「震災と復興の取り組み―阪神・淡路大震災を経験したコンソーシアムとして―」と題して阪神・淡路大震災の経験を背景に、東日本大震災における学生中心のボランティア活動の取り組みが報告され、最後に福島大学の小沢喜仁副学長から「ふくしまの復興を担う『強い人材』づくり　大学間共同教育事業の取組について」と題して未来の福島を支える人材育成の取り組みが報告されました。

報告の中で、神戸学院大学の岡田豊基学長から「学生が卒業で入れ替わっても継続支援できるように情報をつなぐシステムをつくりたい」と述べられ、今後ボランティア活動を支える人材の育成を継続的に行いたいとの思いが語られました。

事例報告後には首都大学東京の大森不二雄氏をコーディネーターに迎え、事例報告を行った4名の講師とパネルディスカッションを行いました。大森氏は問題提起として、平成26年5月に日本創成会議から発表された「ストップ少子化・地方元気戦略」いわゆる増田レポートの『不都合な真実』を挙げ、地方の再生という課題に対する各大学やコンソーシアムの役割はどのようなものかということについて、活発な意見交換がなされました。

今回のフォーラムには全国各地より117の高等教育機関・行政等から280名が参加し、盛況のうちに2日間のプログラムを終えました。

会場：いわて県民情報交流センター アイーナ

■第1日目：平成26年9月13日（土）13：00～17：40

内　容
全国大学コンソーシアム協議会　総会〈12:15～12:45〉
挨拶〈13:00～13:15〉 ・協議会代表者挨拶　赤松 徹眞 （全国大学コンソーシアム協議会　代表幹事、龍谷大学　学長） ・開催地代表者挨拶　堺　茂樹　（岩手大学　学長） ・来賓挨拶　達増 拓也 氏　（岩手県知事）
シンポジウム〈13:15～16:00〉 【テーマ】大学間連携と地域活性化への取り組み 【パネラー】 松本 長彦 氏　（愛媛大学　理事・副学長） 小田 隆治 氏　（山形大学　地域教育文化学部　副学部長） 岡田 豊基 氏　（神戸学院大学　学長） 小沢 喜仁 氏　（福島大学　副学長（地域連携担当）） 【コーディネーター】 大森 不二雄 氏（首都大学東京　大学教育センター　教授）
ポスターセッション　コアタイム〈12:00～13:00、16:00～17:00〉
高等教育政策の動向と大学間連携への期待〈17:00～17:40〉 里見 朋香 氏　（文部科学省　高等教育局　大学振興課　課長）

■第2日目：平成26年9月14日（日）9：30～11：30

内　容
第1分科会：コンソーシアムと企業との連携 ～ICカードとキャンパスリポーターによる地域の活性化
第2分科会：未内定卒業生20%12万人の防止策、インターンシップについて
第3分科会：国際交流とコンソーシアム
第4分科会：復興と連携

報告を行う神戸学院大学の岡田豊基学長

パネルディスカッション

ポスターセッション会場

第11回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム（岩手開催）
「大学間連携と地域活性化への取り組み」

第4分科会「復興と連携」を主催

この分科会はいわて高等教育コンソーシアムが主催したもので、東日本大震災に対して高等教育機関はどのように関わってきたのか、大学が連携することでどのようなことが可能になったのか、学都仙台コンソーシアムが取り組む『復興大学』の活動、いわて高等教育コンソーシアムが取り組む『教育支援活動』と全国大学コンソーシアム協議会に協力を得て実現した『全国大学からのボランティア教員による震災復興特別講義』を通して、震災復興への貢献のあり方等について検討しました。

■第2日目：平成26年9月14日（日）9：30～11：30

第４分科会「復興と連携」
「『復興大学』復興人材育成教育コースの活動と展望」 報告者：関内　隆 氏 （東北大学高度教養教育・学生支援機構教授）
「大槌小学校への学習支援」 報告者：佐々木 義孝 氏（盛岡大学文学部教授） 春日 菜穂美 氏（盛岡大学教員養成サポートセンター長） 民部田 怜奈 氏（盛岡大学文学部４年）
「全国大学ボランティア教員による震災復興特別講義」 報告者：後藤 尚人 氏（岩手大学人文社会科学部教授）
コーディネーター： 齋藤 俊明 氏（岩手県立大学　理事（副学長））

事例報告を行う佐々木教授（右）と民部田さん（左）

全体討論の様子

東日本大震災津波から３年半が経過しました。その間、いわて高等教育コンソーシアムでは、加盟校の密接な連携のもと、特に「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」に包括される「地域を担う中核的人材育成事業」において数多くの取り組みを行なってきました。

この分科会では、学校教育支援研究チームによる「大槌小学校の学習支援―被災地学校支援プロジェクト―」について、また全国大学コンソーシアム協議会加盟大学の協力をえて開講するに至った「全国大学ボランティア教員による震災復興特別講義」について、２つの特徴的な取り組みを報告しました。

「大槌小学校の学習支援―被災地学校支援プロジェクト―」は、大槌小学校において盛岡大学と岩手大学の教員志望学生を中心に実施されている活動です。報告は、盛岡大学教員養成サポートセンター長・春日菜穂美教授、佐々木義孝教授、実際に大槌小学校で支援活動に携わっている学生の民部田怜奈さんによって行なわれました。

活動の内容は、授業中の学習補助、休み時間の遊び補助、給食の配膳や清掃指導などで、教育活動の支援を通して、学生の学校教育に関する理解や教育実践力の向上にもつながっています。学生たちは戸惑いもあるものの、教員のあり方を問い直すことができる充実した活動になっています。

「全国大学ボランティア教員による震災復興特別講義」は今年で３年目を迎え、前期の「ボランティアとリーダーシップ」、後期の「危機管理と復興」について岩手大学の後藤尚人教授が報告しました。この講義の開講にあたっては、復興とともに復興教育のあり方についても考えるということから、各分野の専門家を全国に公募した経緯があります。

2012年度には、14の大学から14名、2013年度には、13の大学から15名のボランティア教員が講義を担当しました。この取り組みは、いわて高等教育コンソーシアムの加盟大学間の連携を越えて、全国の大学と教員に連携を求めて復興教育を実施したという点で、前例のない取り組みとなっています。

また、学都仙台コンソーシアムを代表し、東北大学の関内隆教授から「『復興大学』復興人材育成教育コースの活動と展望」と題して報告がありました。

報告を通して、復興もさることながら、人口減少社会のかなたに地域社会の持続可能性を探るにあたって、今後のいわて高等教育コンソーシアムの可能性と方向性を改めて確認することができました。

シンポジウム

「震災の記録と記憶をどうとどめるのか ―震災資料の収集保存と活用―」

東日本大震災から三年余が過ぎ、復興計画に基づいた大規模土木工事が本格化して、防潮堤や市街地の整備が目に見えて行われ始めようとしています。また、被災地に震災遺構を残すことやメモリアル施設の建設計画なども明らかにされつつあります。そうした中で、震災の記録と記憶をどうとどめるのかという命題は、東日本大震災において自明のことであるといっていいでしょう。なぜならば、震災の記録はその地の歴史であり、文化そのものであると認識されてきているからです。

とはいえ、それをどのような考え方でどのように収集し、どのように活用するかということについては、それを行う主体によってさまざまな違いがあり一様ではありません。このような状況で参考になるのが、阪神・淡路大震災と新潟県中越大震災の被災地でのあり方です。この二つの震災は、まったく対照的な地域に起こった震災で、前者は近畿地方の都市市街地に大きな被害があり、後者は新潟県中越地方の中山間地域が被災地となりました。被災地の違いによって、震災の記録・記憶のとどめ方も大きく異なる部分と共通する部分がみられます。

こうした実情を鑑み、二つの被災地から学び、復興に向けた記録・記憶のとどめ方について提言を行いました。

第１部　震災資料の収集と保存

東日本大震災の被災地で実際に行われた被災資料の救済と震災資料の収集について、福島県双葉町の事例を報告していただきました。同町の他にない特色は、資料保存および調査研究を筑波大学と連携し行っているという点で、写真資料を用いて時系列で解説されました。

続いて、阪神・淡路大震災において現在でも継続されている試みを、兵庫県、神戸市および大学といった公の立場から資料群を収集保存し、構築された震災アーカイブのあり方と、「阪神大震災を記録しつづける会」などの市民主体の民間団体が収集保存し、市民の生活に根ざした資料群から構築された震災アーカイブのあり方という異なる立場での営みとして提示していただきました。阪神・淡路大震災後、多くの震災の記録と記憶を残す試みが行われましたが、講師のお二人は震災直後からその活動に関わってきた方々で、現在に至るまでの震災アーカイブのあり方の変化などについてもお話しいただきました。

第２部　震災メモリアル施設のあり方

阪神・淡路大震災と新潟県中越大震災のメモリアル施設として設立された「人と防災未来センター」（兵庫県）、「中越メモリアル回廊」（長岡市）について、各施設がどのような構想を背景に設立され、運営されているかを提示していただきました。講師のお二人は、震災直後から施設の立ち上げと運営に精通している方々であり、各地域の事例を踏まえながら、東日本大震災の被災地にふさわしいメモリアル施設のあり方を考えていきたいという趣旨のもとお話いただきました。

パネルディスカッションでは、講演者とコーディネーターによるディスカッションのほか、岩手県復興局や自治体職員、大学教員や大学生など、復興に携わる幅広い立場の方から多くの質問が寄せられました。最後に、震災の記録と記憶のとどめ方に関して、過去の震災から学ぶことの重要性と、地域に見合った体制をつくりあげていくことの大切さが説かれ、示唆に富んだフォーラムとなりました。

日時：平成26年6月21日（土）13:15～17:50
会場：ホテルルイズ（盛岡市盛岡駅前通7-15）

内　容
■第１部　震災資料の収集と保存〈13:15～14:45〉 ○東日本大震災関連資料の保全　― 福島県双葉町の保全作業から ― 福島県双葉町教育委員会教育総務課生涯学習係総括主任主査　吉野 高光 氏 ○震災資料をつなぐ　― 阪神・淡路大震災から東日本大震災へ ― 神戸大学　地域連携推進室　地域連携研究員　佐々木 和子 氏 ○手記集から読み解く「震災体験」― 20 年「記録しつづける」ことの意味 ― 阪神大震災を記録しつづける会　事務局長　高森 順子 氏
■第２部　震災メモリアル施設のあり方〈15:00～16:00〉 ○人と防災未来センターの設立経緯とその活動 阪神淡路大震災記念　人と防災未来センター研究部長　村田 昌彦 氏 ○中越メモリアル回廊の取り組み 長岡震災アーカイブセンターきおくみらい研究員　山崎 麻里子 氏
■パネルディスカッション〈16:15～17:50〉 ○コメンテーター 岩手歴史民俗ネットワーク事務局・岩手大学教授　佐藤 由紀男 氏 ○コーディネーター いわて高等教育コンソーシアム地域研究推進委員会・盛岡大学教授　大石 泰夫 氏

パネルディスカッション

会場の様子

平成26年度　前期集中講義「ボランティアとリーダーシップ」

前期集中講義「ボランティアとリーダーシップ」は全国の大学からのボランティア教員の協力によって運営され、ボランティア活動に関する知識や技能、リーダーの役割、組織の動かし方などについて学び、様々な状況に対応し得る能力と知見を修得することを目的に、平成 24 年度に開講した特別講義で、今年で3年目になります。過去2年間は5月～8月までの土曜日の午後2コマずつ7回（7回目は3コマ）をほぼ隔週で行ってきましたが、本年度は9月1日から9月5日までの集中形式で実施し、その中に2泊3日の合宿を盛り込んだ新しいかたちの講義となりました。

9月2日～4日の合宿を中心に、初日の9月1日は事前指導、最終日の9月5日はまとめという位置づけでプログラムを組みました。合宿中に6コマ分の授業と2コマ相当の被災地でのボランティア実習（「大槌町菜の花プロジェクト」を支援：大槌川の河川敷で石拾いと菜の花の種まきを実施）を行い、被災地の状況（釜石市鵜住居（うのすまい）地区と山田町）について地元の方々からの説明も聴くなど、密度の濃いスケジュールとなりました。

受講生は、岩手大学 20 名、岩手県立大学5名、盛岡大学 10 名、一関工業高等専門学校1名の 36 名でした。また本年度はこの特別講義を広く還元することを目的に全国に参加者を募ったところ、上越教育大学大学院1名、常葉大学1名の2名が加わり、計 38 名が受講しました。

総勢5名の教員ボランティアが担当し、長崎県立大学の西村千尋教授、鹿児島大学の肥後祥治教授、四天王寺大学の吉田祐一郎講師の3名が5日間の全日程に参加したほか、電気通信大学の山本佳世子准教授が1泊2日で合宿に合流、中京大学の宮川正裕教授が9月5日の盛岡での授業を担当しました。

合宿形式で被災地での現地視察・ボランティア実習を盛り込んだ本年度の「ボランティアとリーダーシップ」はこれまで以上に好評で、授業後のアンケートでも「メディアの情報だけでは分からない現地の方の想いが伝わった」「ワークを通して身体で講義内容を実感することができた」という声が寄せられるなど、学びと実践を通じて充実した講義となりました。

三陸ひとつなぎ自然学校 代表理事 伊藤氏による説明

ボランティア実習の様子

初日：コミュニケーショントレーニング

最終日:組織マネジメント（宮川正裕中京大教授）

日程	内　容	会　場
9/1（月）	■コミュニケーショントレーニング 講師：西村 千尋（長崎県立大学 経済学部 教授）	盛岡市：アイーナ 8 F 803
9/2（火）	■被災地（釜石市鵜住居地区）視察 講師：三陸ひとつなぎ自然学校 代表理事　伊藤 聡 氏 ■グループワーク 講師：肥後 祥治（鹿児島大学 教育学部 教授） ■被災地（山田町）の現状解説 講師：びはん株式会社 地域連携推進室 椎屋 百代 氏	釜石市、陸中海岸青少年の家
9/3（水）	■リーダーシップとボランティア 講師：吉田 祐一郎（四天王寺大学 人文社会学部 講師） ■ボランティア実習1	陸中海岸青少年の家、大槌町
9/4（木）	■高度情報化とボランティア 講師：山本 佳世子 （電気通信大学 大学院情報システム学研究科 准教授） ■ボランティア実習2	陸中海岸青少年の家、大槌町
9/5（金）	■組織マネジメント 講師：宮川 正裕（中京大学 総合政策学部 教授） ■振り返り（グループワーク） 講師：後藤 尚人（岩手大学 人文社会科学部 教授）	盛岡市：アイーナ 5 F 501

平成26年度　前期「いわて学」

宿泊現地講義：福幸きらり商店街の見学

宿泊現地講義：川石水産の見学

回	実施日	テーマ・内容	講師
1 & 2	5/17（土）	○グループワークで考える三陸 ○地誌から知るいわて	岩手県立大学 豊島 正幸
3	5/24（土）	○世界遺産候補 「橋野高炉」から知るいわて	岩手大学 小野寺 英輝
4		○産業・経済から知る三陸いわて	岩手経済研究所 谷藤 邦基
5	5/31（土）	○文学から知る三陸いわて	盛岡大学 塩谷 昌弘
6		○現地講義に向けて	岩手県立大学 豊島 正幸
7&8&9	6/7（土）	○博物館から知る三陸いわて （岩手県立博物館での現地講義）	岩手県立博物館 学芸員
10&11 12&13	6/14·15（土·日）	○現地で知る三陸いわて：1泊2日 （釜石・大槌・山田での現地講義）	旧釜石鉱山事務所、 おらが大槌夢広場（ガイド２名）、 福幸きらり商店街（山崎 会長）、 ㈱川石水産（川石 社長）
14	6/28（土）	○三陸復興に向けた 県のプロジェクト構想	岩手県政策地域部 科学 ILC 推進室 科学技術担当課長 髙橋 浩進
15		○グループワーク（まとめ）	岩手県立大学 豊島 正幸

「いわて学」は、いわて高等教育コンソーシアム共通授業として、岩手県立大学が主務校となり平成 22 年度から開講しています。

平成 26 年度前期は、『「三陸から知るいわて」～いわての復興を考える』をテーマに、５月 17 日（土）から６月 28 日（土）までの 15 回開講、学生 81 名が履修し、三陸地方の「自然」「歴史」「復興のすがた」について学びを深めました。

現地宿泊講義（６月 14 日から 15 日）では、大槌町・山田町を訪れ、大槌町の「福幸きらり商店街」の見学や山田町の川石水産社長からの水産業の現状などの説明を通じて、被災地で暮らす人々と「いわての復興」への思いを共有しました。

参加した学生からは、「実際に被災地を訪れることで、被害状況や復興の状況を体感することができ有意義な講義であった」という意見が多数寄せられるなど、学生が主体的に「いわての復興」について考えられる授業となりました。

宿舎内でのグループ検討

講義風景

いわての大学に行こう！ —いわて5大学、駅前講義—

８月５日（火）、岩手県立大学アイーナキャンパス（盛岡駅西口）において、県内高校生の大学進学率向上を目的として、系統別説明会「駅前講義」を実施しました。

県内 17 校から、主に高校 1·2 年生 96 名の参加があり、岩手県内５大学の教員の講義を通して、大学における「学び」や将来の職業選択、それに向けた高校での「学び」について理解を深めました。

受講した生徒からは、「講義の内容が興味深く、様々な視点から物事を考えられるきっかけになった」「各系統の知識を得ることができ、今後の志望大学や職業の選択の参考になった」等の感想が寄せられました。

講義の様子

実施時間	系　統	講　師	講義名
10:15～11:00	人文・教育	盛岡大学文学部 風丸良彦 教授	グローバル時代のコミュニケーション
11:15～12:00	工　学	岩手大学工学部 成田晋也 教授	工学部で学ぶ！
13:00～13:45	経済・経営	富士大学経済学部 影山一男 教授	世界経済の構造変化 新興国経済の台頭とその意味について
14:00～14:45	医・歯・薬	岩手医科大学薬学部 那谷耕司 教授	薬学部で学ぼう
15:00～15:45	看　護	岩手県立大学看護学部 工藤真由美 准教授	看護職の可能性 看護とは？看護職とは？

被災地学校支援プロジェクト　「大槌小学校の学習支援」

この支援は、小学校からの学習支援の要望に対し、いわて高等教育コンソーシアムの地域研究推進委員会の学校教育支援チームとして活動しているもので、被災地学校における学習環境の整備と改善のための人的支援を行っています。学生を被災地に派遣し教育活動を支援するとともに、学生の学校教育に関する理解や教育実践力の向上を図ることを一つの目的としています。

また、大学教職員による被災地学校の状況調査や提言・ニーズに応じた支援を行うことも目的の一つです。この支援は、震災から2年8ヶ月経った、平成 25 年11月21日から実施し、2年目を迎えました。支援当初は、子どもたちの多くが仮設住宅の不自由な生活や仮設校舎での制限や制約の多い学習環境により、学年によっては精神的に不安定な状態で立ち歩いたり、大声を出したりする子どもが多くいるなど、子どもたちが授業に集中できないことが問題となっていました。学校としても担任の指導だけでは限界があり、個人への支援とともに学級全体の正常な授業を成立するための支援体制が望まれていました。教育実習校訪問の際に大学生への学習支援の要請があり、いわて高等教育コンソーシアムとして授業や諸活動、行事などの学習支援がスタートしました。本年 12 月 9 日までに参加した学生の延べ人数は、525 名となっています。

昨年度は毎週火曜日は岩手大学、木曜日は盛岡大学が支援に入りました。学生は各学年・学級への割り当てのほか、特に支援が必要な学年･学級に対して、集中的に支援に入ったり、習熟度別指導として3グループに分けて授業を行った結果、徐々に落ち着いて学習ができるようになりました。今年度は毎週火曜日に両大学が合同で支援に入っています。特に支援が必要であった学年・学級は新担任の一新した指導もあり、昨年度支援を経験した学生の誰しもが驚くほど、新年度には学年・学級、子どもたちに望ましい変容が見られました。

学生は、そのような子どもたちの支援に対し、戸惑いや悩みも多くありましたが、帰りのバスの中でその日の支援について情報交換したり、被災地支援以外の学習支援のボランティア活動の経験を活かしたりしながら、根気よく支援を続けました。この支援の目的である学校教育に関する理解や教育実践力の向上を図ることができたとともに、子どもたちへの支援活動への大きな一助として、少なからず自信となったと考えます。

現在、低学年の子どもたちへの支援が必要となっています。これから支援する学生はこれまでの支援を振り返ったり、昨年度の経験を活かしたりしながら、将来的に教員として自信をもって指導ができるよう、多くの実践経験を身に付けることを期待しています。

学習支援の様子

大槌小学校の仮設校舎

教室の様子

…特別寄稿…　復興へのメッセージ

鹿児島大学 教授　肥後 祥治氏

前期集中講義「ボランティアとリーダーシップ」
2日目担当講師

●ボランティア講師としての学び

私が担当させていただいているのは「ボランティアとリーダーシップ」の「グループ・ワーク」です。中身は、障害児教育の教師やボランティアの養成や地域の教育委員会や学校へのコンサルテーションの中で学んできたものから構成されていました。被災地で実施するプログラムとして役に立つか不安を感じながら始めて今年で3回目となりました。今年は、1週間近くにわたる連続実施の全てのプログラムに参加することができました。受講した学生さんと同様に、私自身も他の先生方の講義の奥義を体験を通して学ぶ機会を得ることができたことは、教員としてとても有意義でした。

また、これらの学生さんたちと共に実際のボランティア活動をする経験も役に立ちました。どのような場面で彼らが活動し、どのような態度で活動に向かっていくのか、私たちが提供してきた知識や技術はどのような場面で使われうるのかといったことは、この場に参加しなければつかめなかったと思います。これらの経験は、私にこのプログラムを吟味させるきっかけを与えてくれるでしょう。

当初私は、「この地域の被災地のボランティアを」と思い入ったつもりでおりました。しかし、今年に入り台風や火山の噴火等による被害の報道を聞くにつれ、東北で学んだことが、私の住む地域のボランティアに大きな意義があることに気づきました。私の住む鹿児島も台風や桜島による災害と向き合ってきた地域なのです。今、鹿児島の桜島は、100年前の大正大噴火のような噴火を心配される時期に入っています。ここ東北での講義をとおした受講者との交流は、実は私のためのレッスンでもあったのだと理解できるようになりました。今後も相互に学び合えれば良いと思っています。

名古屋産業大学 特任教授　和泉 潤氏

後期集中講義「危機管理と復興」
第9・10回担当講師

20世紀までは、災害は神様が人間に与えた試練であるという運命論が、多くの国の人々の考えにあり、災害への対応は、災害が発生したあとの救急・救援に主眼が置かれていましたが、それでは災害の被害を軽減することは難しいことから、21世紀の防災の考え方は、災害後の復旧・復興に主眼が置かれるようになってきました。すなわち、速やかに日常の生活が再び送れるよう復旧を進め、そして、人々が災害の危険性を肌で感じているこの時期に、次に襲うであろう災害に対して安全になるための復興を進めていくことが防災の主流になってきました。

この復旧・復興は、国や市町村が計画を作って進めていきますが、ここで重要なことは、この計画づくりに、安全を必要とするそこに住んでいる人々が参加していくことがあげられます。そして、この復旧・復興の計画が、生活する場所を安全にするのかを確かめる（評価する）ことが必要です。もし、安全でないことが分かったのならば、計画を修正していかなければなりません。このような復旧・復興計画を進めていくことで生活の場所を安全にしていくことができるのです。

これからもいろいろな計画が作られていきますが、復旧・復興計画をはじめとして、都市計画など人々が生活する場所に関係する計画は、計画への人々の参加と計画の安全性に関する評価を行っていくことが必要で、これまでの計画についても、もう一度、見つめ直すことが必要ではないかと思われます。

【特別寄稿について】
この特別寄稿は、いわて高等教育コンソーシアムが平成24年度より新規に立ち上げた特別集中講義で全国の大学からボランティアで講師をご担当いただいた先生方から、「復興へのメッセージ」をテーマに、いわて高等教育コンソーシアム集中講義での担当講義の概要説明や、講義を担当したことで改めて感じたこと、所属大学での復興へ向けた取り組みの紹介、被災地・被災者へ向けたメッセージ等について寄稿していただいたものです。

※岩手大学長 堺 茂樹 氏においては、病気療養中のところ、平成26年11月16日（日）に逝去されました。
ここに生前のご厚情に深く感謝するとともに、故人のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

今後の行事予定 平成26年度

事業内容	開催日	開催場所	対象
平成26年度 高大連携「ウィンターセッション」	平成26年12月25日～27日	12/25・26　各大学 12/27　盛岡市民文化ホール（マリオスホール）	岩手県内の高校生
第15回 平泉文化フォーラム	平成27年1月24日～25日	水沢グランドホテル	一般市民
平成26年度いわて高等教育コンソーシアムシンポジウム「地域連携・地域支援の取組状況と今後の課題・展望について～地域が望むこと、私たちができること～」	平成27年2月7日	ホテルメトロポリタン盛岡本館	教育関係者、一般市民

発行連絡先
いわて高等教育コンソーシアム事務局
（岩手大学総務企画部総務広報課内）
〒020-8550 岩手県盛岡市上田三丁目 18-8
TEL.019-621-6855 FAX.019-621-6014
E-mail : ihatov5@iwate-u.ac.jp　URL : http://www.ihatov-u.jp/

構成校
岩手大学
岩手県立大学・岩手県立大学盛岡短期大学部・岩手県立大学宮古短期大学部
岩手医科大学
富士大学
盛岡大学・盛岡大学短期大学部
放送大学岩手学習センター
一関工業高等専門学校

平成26年12月22日発行